

森林管理局の協力の下に現地検討会を開催

関東整備局（川崎市）では、10月8、9日に、関東森林管理局の森林技術・支援センター及び茨城森林管理署職員を講師にお願いし、茨城県内の国有林をフィールドとした現地検討会を開催しました。

複層林試験地では、様々な形態の二段林や、1ha程度の伐区をモザイク状に配置する施業体系が試行されています。上木110年生、下木30年生以上の林分もあり、長い取り組みの歴史の中で、タイプの違いによる下木の成長への影響や、上木の伐採時の下木の損傷などの課題を実感することができました。

人工林への広葉樹の導入を図る試験地では、広葉樹の進入や植栽木の生育の状況を踏まえて広葉樹育成区、針葉樹育成区などにゾーニングし、これを随時見直しています。針広混交林化は不確実性を考慮する必要があるため、森林の取扱方針を順応的に明らかにしていく仕組みは有効ではないかと考えさせられました。

列状間伐により2千 m^3 を生産した間伐・搬出後の現場では、一般競争による請負事業でありながら、発注者は標準的な形を示して個々の伐採列の選定や集材路の路線決定は請負業者に委ね、判断に迷う場合のみ協議しているそうです。列状間伐は生産コストが低く安全性が高いなどのメリットがあり、国有林の取り組みにより、これを適切に実行する事業体も育っています。当センターでも、造林地所有者の理解を得るための戦略を用意するなど一層の主導的な取組が必要との認識を深めました。

今後とも、国有林との連携・協力を進めていきたいと考えています。



(複層林試験地)



(列状間伐実施箇所)